

旭いおかの まちづくりを目指して (三)

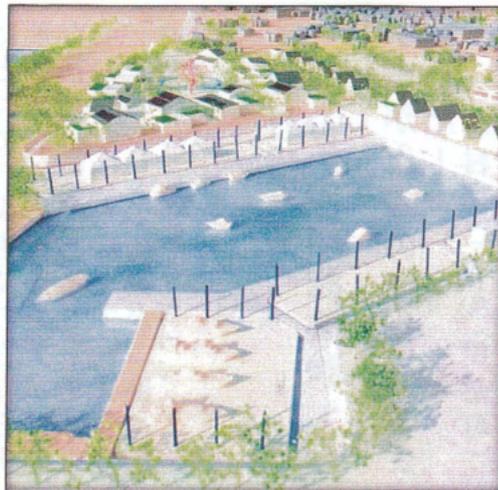
皆さんは旭いおかを、ど
いおかにしたいですか。
（光風キャンピング実業
員会）が行った復興観光
ちづくりコンペディション
授賞した作品を参考に考
くさい。

Appomuneditiv ILOK

暮らしてもに生きる・活きる

日本大学生産工学部
教授 川岸梅和
博士後期課程三年 野田りさ
私の前は、飯岡の豊かな海
のより良い共生を目指し、
「コミュニティづくり」と「住
まいづくり」を柱としたハ
ドとソフトの同時進行型の提
案をしました。
海岸エリアには、遊歩道（堤
防）、防波（潮）堤や海成を
かしたビーチ、ステアの整備、
漁港エリアには、浮体ユニ
トによる飯岡漁港の再生、
たな観光拠点の配置など、防
ンズ観光モデルを提案してい
興減災を前提とした新しい復
ます。観光モデルを提案してい

「まち」は「ひと」という資源
があり、これを結びつけることで、
地域を再生し防災減災ができ
るまちにする。これらと新たな
観光産業を核としたまちを
つくる。これが私たちの提案で
す。



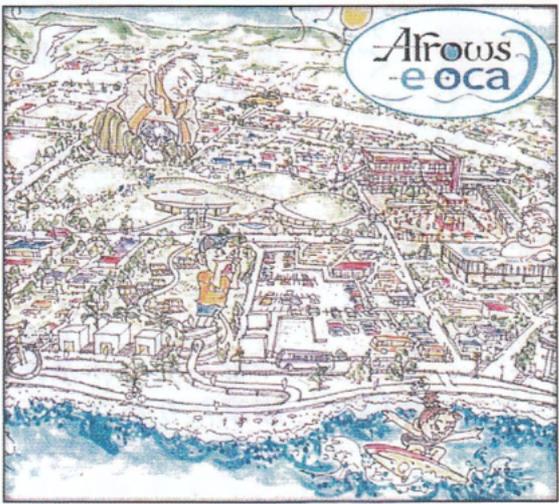
「まち」は「ひと」という資源
があり、これを結びつけることで、
地域を再生し防災減災ができ
るまちにする。これらと新たな
観光産業を核としたまちを
つくる。これが私たちの提案で
す。

eiiooca Arrows いいおかの希望の矢

NHKアートチーム
代表 茂野純司

わたしたちの提案「eiiooca Arrows」は、
九十九本の矢を引用してい
ます。
飯岡にはすばらしい「れきし」

大原幽学の教えや飯岡助五郎
の生き抜くチカラから学ぶ「キ
ャラバン（市民活動組織）」
を組織し、それが中心となっ
て企画・計画・運営する観光
拠点をつくり出します。さら
に、防災の日常活動から防
災減災のしくみ、まちとヒト
のしくみ、まちとヒトがなが
るしくみをつくりだします。
また、観光誘客のために、マ
スコットキャラクターの開発や
地域のプロジェクトの展開や
岡のプロジェクトの認知度を
くります。飯岡の認知度を
などの情報発信を行って開
くことも必要であると考えま



防災教室

同じ県民としてできる
ことを！

佐倉市社会福祉協議会ボラン
ティアセンター（六月一日）
飯岡仮設住宅には今回で三回
目になる。被災者の要望を聞
いて、窓ガラスやエアコンの
掃除、また皆さんにほつと
植えたおともある。今回は三
十名の方と共に入梅前を流
飯九名の会員と共に汗を流し
た。その後の福祉センターで
に部さんから被災体験や防
がどううございました。

命、そしてがんばろう
県立勝浦若潮高等学校、第
一学年
（六月五日）



旭市の震災状況を知らな
に六十六名の生徒と先生
参加して、まち歩きや津波
難しさを体験した。その後
ユタピアを見学した。三
語交流部さんからの体験を
は語り部さんを持った。大
変熱心に研修していた。
は、学年主任の峰島雄一先
とこの命の大切さを学んで



復興がわら版

発行 旭市上永井二二七
Tel & Fax 0470(57)5789
編集 光と風キャンペーン実行委員会
旭市市民活動登録団体

旭いいおか復興観光まちづくりりに寄せて
千葉大学名誉教授 北原理雄

「旭市いいおか復興観光まちづくりコンペティション」は市民グループによる手作りの企画です。東日本大震災で被害を受けた各地でいろいろな取り組みが行われていますが、このように市民が主役になつて多くの人の知恵を集め、まちづくりの青写真を描く試みは他に例がありません。とても貴重な挑戦です。

主催者の呼びかけに、全日本から三九の作品が寄せられました。どれも飯岡の問題をしっかりと理解し、安全で活力ある地域を再建しようとする思いのこもった力作です。災害への備えと観光振興だけでなく、地域の人の心の毎日の生活、お年寄りへの心づかい、文化などもちの教育、郷土の豊かな暮らしを総合的に再生しようとする提案が多岐にわたりました。

特に授賞の八作品は、みんなが安心して暮らせる飯岡、多くの人が訪れる飯岡を提議する人たちが、希望に満ちた「夢」を与えてくれます。

域的な新しいシンボルになる魅力的な施設が提案されている。その道筋が分かるものが多い。すくなくとも復興と振興を一緒に組む人たちに力と勇気を与えてくれます。

コンペティション（提案を競うコンテスト）は終わりました。が、飯岡の復興観光まちづくりはまだスタートです。これからは市民がアイデアをもとに、いろいろな提案を提出し、実現に向けて取り組んでいきたいと思います。

「語り継ごう 私の津波体験」
鈴木憲一さん（下永井）

これはダメだ！

「語り継ごう 私の津波体験」は、私の体験を基に、家族や友人と語り継いでいくことが、被災者の心の支えになる。そして、後世に伝えることで、防災意識を高めることに役立つ。私の体験を、ぜひ多くの人に伝えてほしい。



大地震の後、家族で高台に避難した。家が壊れた。水が自宅に浸った。途

から歩いて行った家が一目もみられなくなった。家は壊れた。水は妻の背にたがった。家は壊れた。水は妻の背にたがった。家は壊れた。水は妻の背にたがった。

大鳥居がひっくり返った
林あきさん（旭、駒込浜）

私は釣りが好きで、海が近い自宅に住みたかったが、妻は「津波が怖い」という。家は解体し、今は銚子に住んでいる。



庭に花の種を蒔いて、早く逃げる。津波が来たとき、庭に花の種を蒔いて、早く逃げる。津波が来たとき、庭に花の種を蒔いて、早く逃げる。津波が来たとき、庭に花の種を蒔いて、早く逃げる。

津波避難タワーが完成

旭市津波避難タワーが完成した。これは、市民の安全を守るための重要な施設である。避難タワーは、津波が来たときに避難するための安全な場所を提供する。市民は、避難タワーを利用することで、津波からの被害を最小限に抑えることができる。

「しぐれ揚げ」復活

「しぐれ揚げ」は、旭市で有名な伝統的な揚げ物である。しかし、震災で生産がストップした。現在は、地元企業と協力して復活を目指している。市民は、復活した「しぐれ揚げ」を味わうことで、旭市の文化を継承することができる。



「しぐれ揚げ」復活
（株）山中食品

一年前の大津波で全壊した「山中食品」が四月から再び生産を始めた。元従業員も一部戻って、生産が順調にいけばもつと雇用を増やしたいという。

「しぐれ揚げ」復活
（旭市萩園 Tel 5713456）

とに復活した。機械も設備も真新しくなつて不安もあるが、経験を生かして丁寧に製品を作りたいたい。希望者は是非買って欲しい。



被災した

各地区からの報告(一)

横根東浜区の現況について

横根東浜区長 戸井 穰

この世の終わりとばかりかと思えるような大地震と大津波。当区は元三十世帯、百名前後が住んでいました。今回の震災で二世帯の内五世帯が全壊、十一世帯が大規模半壊、また御一人の尊い命が失われました。いまだに三世帯が避難生活を余儀なくされています。又他市へ移転された一軒、他地域へ五軒移転されました。現在は二十世帯約六十名で、最高年齢は九十歳の男性です。

高年齢に伴って皆さん静かすぎる。毎日を送っている現況です。この店は数店が閉店し、活気がありません。区民館に至ってもありませぬ。泥水が入り、維持も再建も難しく解体する羽目になりました。片付けの日は大勢のおボランティアの方々に大変お世話になりました。復興は容易ではありませんが、当時の査定基準に苦情が出ることには残念なことですが、全般的に復興がすすんでいくのを望みます。昨年行かなく、復元もトーンが明るく、みなさん協力して復元をすすめていきたいと思います。

け合ったことを忘れず、これからも前向きに生きていこうではありませんか。小さな叫び—横根西浜区 横根西浜区長 宮本 勇 真つ黒な悪魔が海から矢指川からと山のように襲いかかり全戸被災し多くの財産と三名の尊い人命を奪われてしまつた横根西浜区。一年九ヶ月ほど過ぎた今、「以前より家が揺れるような気がしない?」「道路が振動する気がする。」—川底が浅くなつて



私共の西下町区は海に面しており、潮風を感じながら暮らすのが好きです。しかし、この震災で、軒屋も倒壊し、家も壊れてしまいました。地震の被害は、軒屋や津波の被害を受け、家や物などが壊れてしまいました。現在、我が国では高齢化が進み、若者が減り、地元の活性化が難しくなっています。定期的な行事や清掃活動など、地域の絆を強めることが大切です。震災から一年九ヶ月が過ぎましたが、仮設住宅や避難所での生活が、少しでも楽になることを願っています。

被災した声が聞こえてきます。津波を見てしまったのです。体験してしまつたのです。大量の海水が駆け巡つたわけですから、道路も河川も傷ついています。防波堤と矢指川の開口部をどうするか、明確な対策を示してほす。復興税の有効活用を望みます。小さな叫び—西下町区長 柴 信一

「まねき猫ハッピーキャット」からのお知らせ
当会は男女四人の軽音楽グループです。老人ホーム、慰労会等無料で演奏します。TEL 079-5515206



旭市観光写真ボランティア会では、旭市を訪れた観光客の方々に、旭市の観光スポットの案内、写真撮影のアドバイス、紙芝居などを通して旭市の良さをアピールして、多くの人をリピーターにしていただくことを目標に活動しています。紙芝居「あか防災ずきんちゃん」は防災の知識を分かち合える楽しい知識を分かち合えるという思いで上演しています。一緒に紙芝居をしてみたいです。また上演してほしい方がいます。TEL 5515206 無料